

# 上条 報告

第36号  
平成24年5月

甲州市教育委員会  
☎32-5097

## 早川町・赤沢へ 行ってきました

南巨摩郡早川町の赤沢地区は、「ご承知のとおり県内で唯一の重要伝統的建造物群保存地区です。平成五年七月に選定を受け、十九年を経過しています。数年前に集落内に蕎麦屋がオープンし、マスコミに取り上げられ、賑わいが戻りつつあると紹介されてきました。

赤沢は「講中宿」という特異な集落です。身延山と七面山とを結ぶ参詣路の中間に位置し、毎年多くの参詣客を迎えていたことが、現存する多くの旅館からもわかります。ここで一泊し、十分に休息してから、七面山や身延山を目指して出立したのでしょうか。

訪ねたのは四月十五日で、甲府ではサクラはすでに満開を過ぎていましたが、赤沢ではちょうど満開を迎えており、春ののどかさを満喫できる日和でした。観光客も比較的多く、宿内を散策していると必ずどこかですれ違う感じでした。蕎麦屋目当ての観光客もいたようで、店の前では順番待ちの客が見えました。



赤沢の全景。周辺の急斜面の土地よりも若干緩やかな場所を選んで、見事に集落を作っています。

### 早川町赤沢（山村・講中宿）

所在地	山梨県南巨摩郡早川町赤沢
種別	山村・講中宿
条例制定年月日	平成二年一〇月一日
選定年月日	平成五年七月一四日
地区面積	約二五・六ヘクタール
保存物件数	建築物 八四件 工作物 三九件 環境物件 一一八件

早川町は南アルプス連峰を抱える県西部に位置し、九六パーセントが森林地で、山村文化をよく残しているところとす。町の最深部・奈良田地区は平家の落人伝説があり、昭和四〇年代に水力発電開発がされるまで、外部との接触がほとんどなかったといえます。ここには、国指定の有形民俗文化財として「奈良田の焼畑用具」があり、これも県内唯一の指定物件です。赤沢の始まりはよくわかっていません。長野から移り住んだ祖先をもつ方もいて、木材の豊富さからそま師、大工、木挽きなどの職人が多い集落でした。

江戸時代に入ると、徳川家康の側室・お万の方も赤沢を通り七面山へお参りしました。講中宿としての赤沢が賑やかになってきたのは明治以降で、現存する宿屋は明治以降二階屋に改造したものも少なくありません。昭和の初期までは賑わいを見せていた赤沢も、戦後は交通事情の変化から、利用する参詣者も少なくなり、若者が流出してしまいました。旅館の建物には、多くの共通点が見られます。二階建てで上下とも障子で開口部を広く取り、開放的な造りです。講中の大勢の客が入りし寝泊りできるように、できるだけシンプルにした結果でしょう。現存する旅館建築の多くは、明治以降に建てられたものです。



旅館・江戸屋の全景。開口部が非常に多い造りは、宿内の旅館に共通します。



江戸屋土蔵。庇の葺き材は板です。



大黒屋。観光客が急坂を上り見学しています。



人気の蕎麦屋も坂を上ったところです。



大阪屋の全景。一階も二階も間口を大きくとっている点は他の建物と同じです。



主屋の軒下に並ぶ板マネギ。大正時代に講中が奉納したもので、定宿を表します。

宿場の中ほどに、日蓮宗の妙福寺があります。この寺は、古くは七面山御本社敬慎院（身延本山別院）の「鍵取役」といって、世話方を担当する寺院でした。別院とはいっても、身延山から遠方にある七面山の霊場管理は本山からでは困難であるため、中間地点の当地に置いたものでしょう。



妙福寺本堂(右)と八幡宮(左)。

赤沢はとにかく坂道が多いところです。この坂道の大半が石畳で舗装されており、特に急な箇所には階段も作られています。石畳の両側には石垣が起立し平坦な面を造成しており、旅館や住まいが建ち並んでいます。これらの坂道・石畳・石垣は、赤沢を代表する重要な景観でもあります。

耕作地はあまり見られず、宿のはずれの傾斜地に茶畑がありました。昔から農業による収入自体は比重が軽かったと思われる。一方、宿場という性格から、旅館業だけではなく参詣者の荷物の運搬、参詣者の駕籠かつぎ、雨畑石を使った硯づくり、大工仕事の合間

に行った下駄づくりなど、客相手の商売による現金収入が早くからあったものと考えられます。



曲がりくねった石畳の急坂。



石垣の上に建つ金坂屋と、石畳の坂道。



喜久屋(休憩所)は閉まっています。



大黒屋。しだれ桜とともに、赤沢の顔ともいえる風景です。

戦後の自動車の普及に伴い、身延詣も自動車が使われるようになり、講中宿としての赤沢は廃れていきました。昭和四十年代から若者がUターンしはじめ、五十年代にはボランティアグループが結成され、年中行事の復活や学習会など、文化遺産を将来に残すための運動に力を入れてきました。そして平成五年七月、県内初の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、往時の賑わいが戻るかと思われましたが、今、宿場を歩いてみて目立つのは、誰も住んでいない空き家です。

「喜久屋」の看板がかかる旅館には、もうひとつ「歴史文化公園のぶ・はかわ休憩処」の看板がかかっています。伝建選定のころ、空き家を使って整備したのですが、観光客が少ないためか、活用されていない状態が続いています。ですが感心することがあります。道や畑やちよつとした空き地のようなところに、ゴミが全く落ちていないことです。普段の生活の中で、地域をきれいにしようという気持ちが活きているのだろうと感じました。

往時の賑わいは戻らないのですが、現存する建物群を見るだけで、この山間の宿場に一日に千人が訪れたという風景が想像できます。

赤沢を横目に見ながら川へ下っていくと、車で十分ほどで七面山への登山口に着きます。この一帯には見事な滝が何本かあります。

白糸の滝は、徳川家康の側室・お万の方が、本来女人禁制だった七面山に登るためこの滝に打たれ、衆僧の阻止を振り切って参詣を果たし、以来女人禁制を解いたといわれており、滝の前にはお万の方の像が建立されています。

白糸の滝から五分ほど歩くと、雄滝があります。雄滝とは、白糸の滝を雌滝とみての名前です。雄滝の前には弁天堂が建ち、ここで着替えて滝に打たれる修行ができるそうです。

七面山敬慎院へは、登山口から四時間ほどかかります。途中、四つの坊と二つの門が建ち、信仰の山であることを実感できる風景が広がります。



(右)山への入り口。周辺には坊・宿坊があります。(中)白糸の滝。やや幅広に落ちてくる景色は女性風です。(左)弁天堂と雄滝。白糸の滝よりも落ちる水が荒々しいです。